

國學院大學學術情報リポジトリ

宏文学院の日本語教師編纂の教科書における謙讓表現：

『中日対照実用会話篇』と『漢訳学校会話篇』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 薛, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001498

宏文学院の日本語教師編纂の教科書における謙讓表現 — 『中日対照実用会話篇』と『漢訳学校会話篇』を中心に—

薛 静

論文要旨

本稿では、宏文学院の同僚であった唐木歌吉と菊池金正が編纂した会話教科書における謙讓表現の形式を明らかにした上で、松本亀次郎編纂の『漢訳日本語会話教科書』と比較しながら、宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における謙讓表現の特徴を明らかにする。全体的には、松本亀次郎編纂の会話教科書における謙讓表現の形式が最も豊富である。それに対して、菊池編纂の教科書は学校会話に主眼を置いているためであろうか、現れる謙讓表現の形式が最も少ない。謙讓動詞の中で、「差し上げる」を扱う編纂者は松本、唐木である。「蒙る」は松本、唐木が取り上げる表現である。「あげる」はどちらの編纂者も取り上げている表現であり、美化語となる傾向が見られる。謙讓補助動詞の中で、「お（ご）…する」は菊池以外全ての編纂者を取り上げている表現である。また、尊敬の用法は松本編纂の教科書でしか見られない。「お（ご）…申し上げる」を取り上げているのは松本亀次郎だけである。「…申す」は唐木が編纂した教科書のみで見られる。

キーワード：こうぶんがくいん 宏文学院 からきうたきち 唐木歌吉 きくちかねまさ 菊池金正 まつもとかめじろう 松本亀次郎 けんじょうひょうげん 謙讓表現

1. はじめに

敬語は日本語に特有の表現ではないが、日本語の特徴的な表現として、古代からすでに使用されていた。敬語の教育について、『敬語の指針（答申）』では「人が社会生活において敬語を活用できるようになる過程では、学校教育や社会教育での学習と指導が重要な役割を果たす」と記述されており、「こうした敬語の基礎的な知識は、日常生活で見聞きして習得していく実践的な敬語習得と異なり、学校教育での体系的な学習によって、より効果的に習得できるものと考えられる」と指摘されている。したがって、敬語の学習は社会教育のみならず、学校教育も重視されるわけである。そこで、日本語教師の指導法や教科書の選択は敬語教育にある程度影響があると考えられる。

中国人日本語学習者にとって、敬語を学習するのが難しい理由は中国語に動詞としての敬語が少ないからであると王（1989）で指摘されている。また、敬語の中で、謙讓語が特に中国人日本語学習者にとって誤りやすいということは川口（2002a、2002b、2004）から知られる。敬語の教育は従来、国語教育の一環として注目されてきたが、日本語学習者向けの日本語教育においてどのように行われているかは興味深い点である。

日清戦争後に始まった日本語教育は主に清国留学生を教授する対象としておこなわれていた。日本語教育を推進するため、日本国内に数多くの日本語教育機関が成立した。その中で最も代表的な教育機関である宏文学院は日本語教育において大きな役割を果たした。薛（2018a、2018b、2018c、2019）では松本亀次郎編纂の大正期の日本語教科書、会話教科書『華訳日本語会話教典』、会話教科書『日語会話』、文典型教科書における謙讓表現の特徴を明らかにした。会話教科書について、吉岡（2000）では会話教科書は「場面や話題ごとに構成され、そこで行われるである会話のモデルが示されている教材である」と述べられている。

本稿では、松本と同じく宏文学院で働いていた日本語教師が編纂した会話教科書『中日対照実用会話篇』（1906）『漢訳学校会話篇』（1906）を対象として、謙讓表現の使用状況を調査する。その上で、松本亀次郎編纂の会話教科書と比較しながら、宏文学院の日本語教師編纂の日本語会話教科書における謙讓表現の特徴を明らかにする。また、対人関係の条件や場面的条件は辻村（1977）⁽¹⁾を参考にする。

2. 敬語の定義と分類について

『日本語学大辞典』で敬語は「同じ事柄を述べるのに、述べ方を変えることで敬意または丁寧さをあらわす、そのための専用の表現」と記述されている。それに対して、『新版日本語教育事典』では、敬語は待遇表現の一つであるとして、「話し手の敬意、ていねいな態度などを表現する」と説明されている。つまり、日本語教育の場合、敬語は敬意を表すのみならず、丁寧な態度も示すものとして扱われる。

菊地（1997）は敬語を「いわゆる尊敬語」、「いわゆる謙讓語」、「いわゆる丁寧語」に分けて述べており、「いわゆる謙讓語」を謙讓語 A（「謙讓語 A は、話手が補語を高め、主語を低める（補語よりも低く位置づける）表現である」）、謙讓語 B（「謙讓語 B は、話手が主語を低める（ニュートラルよりも《下》に待遇する）表現である」）、謙讓語 AB に細分している。謙讓語 AB の代表的な表現は「お（ご）…致す」である。

文化審議会の国語分科会は、2007年2月2日に『敬語の指針（答申）』を提出した。そ

れ以前は、「敬語」は「尊敬語・謙讓語・丁寧語」の3つに分けて考えていたのが、この指針により、謙讓語と丁寧語が細分され、5種類に分けて考えることとなった。具体的な分類を表1に示す。

表1 敬語の分類（「敬語の指針」による p.13）

5種類		3種類
尊敬語	「いらっしゃる・おっしゃる」型	尊敬語
謙讓語 I	「何う・申し上げる」型	謙讓語
謙讓語 II（丁重語）	「参る・申す」型	
丁寧語	「です・ます」型	丁寧語
美化語	「お酒・お料理」型	

『敬語の指針（答申）』では謙讓語を謙讓語 I と謙讓語 II（丁重語）に分け、謙讓語 I は「自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの」であり、謙讓語 II は「自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁重に述べるもの」であるとしている。また、菊地（1997）のように命名はしていないが、「お（ご）…致す」のような謙讓語 I と謙讓語 II 両方の性質を持つ表現を「謙讓語 I」兼「謙讓語 II」としている。

さらに、菊地（1997）における謙讓語 A、謙讓語 B の機能は『敬語の指針（答申）』における謙讓語 I、謙讓語 II の機能と同じであるため、謙讓語 A イコール謙讓語 I、謙讓語 B イコール謙讓語 II と考えられる。

本稿では『敬語の指針（答申）』の5分類を用いるが、用例を収集する際、謙讓語 I と謙讓語 II 両方の用例を採る。さらに、「謙讓語 I」兼「謙讓語 II」の「お（ご）…致す」に関する用例も収集する。

3. 『中日対照実用会話篇』

3.1 『中日対照実用会話篇』について

『中日対照実用会話篇』は1906（明治39年）年中東書局から発行され、宏文学院の日本語教師唐木歌吉が編纂した教科書である。本稿では実藤文庫に所蔵されているものを用いる。

本書を著した理由は「緒言」で以下のように掲げられている。

日清兩國之交誼日益親密日人之欲學清語與清人欲學日語者遂益加多且近來清國學生來

遊我國者日益增其數兩國語對照之書亦愈為必要而不可缺而其最先之必要者兩國語對照之會話書也此書因應此急需從事編纂而集錄日常應答之語千有奇

また、「清國王君盛春為余任漢譯之勞於是余深信此書編述之意讀者必能一目瞭然用述穎末以謝王君之厚意」（緒言）から、本書の漢訳は中国人である王盛春によってなされていることが窺える。さらに、「書中假張紹良李維漢二君為主人翁網羅其自初抵東京至卒業歸國其間種々事實之會話如乘車訪友購物等日常必須之語凡二十餘項分為二十五回」（緒言）から、本書の主人公と構成が知られる。また、登場人物の人間関係は次の漢文から推測できる。「自是兩人乘人力車而至神田三崎館訪友人范君」（p.4）を見ると、范、李、張は友人同士であり、「王君者張李二君之舊友也」（p.44）を見ると、王、張、李も友人同士であることがわかる。

3.2 『中日対照実用会話篇』における謙讓表現

本書では謙讓表現についての記述は見られないが、「第一回」「第四回」「第六回」における

カシコマル 敬承也（第一回 訪問語 p.5）

頂戴 受ケ、敬語（第四回 歸家語（一）雑語（二） p.25）

オ目ニカカリタイ 欲會見 申シマス 説之敬語（第六回 歸宿語（二） p.43）

のような謙讓語についての説明が見られる。

本書における謙讓表現は23形式、169例である。そのうち、謙讓動詞は13形式、103例であり、謙讓補助動詞は8形式、62例である。また、助詞を介する表現は2形式、4例である。

3.2.1 『中日対照実用会話篇』における謙讓動詞

本書における謙讓動詞の使用状況を表1.1のように示す。

表1.1 『中日対照実用会話篇』における謙譲動詞

形式	活用	用例数	計
参る	未然形 (参ら)	1	42
	連体形 (参る)	1	
	連用形 (参り)	40	
伺う	連用形 (伺い)	13	13
致す	連用形 (致し)	10	10
畏まる	連用形 (畏まり)	8	8
申す	連用形 (申し)	5	7
	連体形 (申す)	2	
お目にかかる	連用形 (お目にかかり)	6	6
存じる	連用形 (存じ)	5	5
あげる	連用形 (あげ)	3	3
いただく	連用形 (いただき)	1	2
	未然形 (いただか)	1	
蒙る	連用形 (蒙り)	3	3
差し上げる	連用形 (差し上げ)	1	1
頂戴する	連用形 (頂戴し)	1	1
申し上げる	連用形 (申し上げ)	1	1
合計			103

謙譲動詞の中で、最も多用されている表現は「参る」であり、1例しか見られない表現は「差し上げる」「頂戴する」「申し上げる」である。

「参る」は全42例見られ、そのうち、「行く」の意を表す表現が9例、「来る」の意を表す表現が33例ある。以下、対人関係の条件から「参る」の使用状況を整理する。

話し手>聞き手・親 (4):「李→下女」(2)、「張→下女」(1)、「范→番頭」(1) (括弧内は用例数である。以下同様)

話し手>聞き手・疎 (12):「教師→張」(1)、「李→書生」(1)、「李→理髪師」(2)、「李→宿主」(1)、「張→主人」(1)、「李→主人」(2)、「張→巡查」(2)、「李→巡查」(2)

話し手<聞き手・親 (8):「車夫→李・張」(1)、「下女→范」(2)、「番頭→張」(1)「下女→張」(1)、「下女→李」(3)

話し手<聞き手・疎 (8):「張→教師」(1)、「宿主→李」(1)、「宿主→張・李」(1)「張→先生」(4)、「張→隣客」(1)

話し手=聞き手・親 (9):「王→李・張」(1)、「李→王」(3)、「張→王」(2)、「張→李」

(1)、「李→張」(2)

上記の通り、42例の会話の中で、話し手<聞き手の用例は16例、話し手>聞き手の用例は16例ある。話し手=聞き手の用例は9例である。また、公的場面で用いる用例は1例である。さらに、親疎の観点からみると、「参る」は疎の関係を持っている人の間で多く使用されている。

(1) [李] ソーデスカ、何時カ、一晚、見ニマ井リマセウ。是麼幾時晚上去看看瞧 (李→下女 p.125)

また、公的な場面で使用する用例は以下の通りである。

(2) 私ハ、昨年四月、東京ニマ井リマシテ…我從昨年四月來到東京… (p.204 演説)

上の例(1)(2)を見ると、「参る」の主語に当たる人物は話し手であるが、聞き手は話し手より身分がより低い、あるいは多人数のため、動詞「参る」は主語を低める意味を持っていないと考えられる。

本書において

(3) [下女] 爾ノ處へ、手紙ガマ井リマシタカラ、オ机ノ上ニ載セテ置キマシタ。寄把爾的信來了放在爾的卓子上 (下女→范 p.25) (破線は主語を表す。筆者による。以下同様。)

のような動詞「参る」の主語が人ではない用例が見られる。つまり、このような用例で「参る」は主語を低める機能がおらず、ただ丁寧さを表す。しかも、このような使い方は本書では2例しか見られない。

本書において「(話など)を聞く」⁽²⁾の意を表す「伺う」は全く現れない。それに対して、「訪ねる」の意の「伺う」は8例見られ、「尋ねる」の意の「伺う」は5例である。また、対人関係の条件から、この表現の使用状況を以下のようにまとめることができる。

話し手>聞き手・親 (0)

話し手>聞き手・疎 (4):「張→事務員」(1)「李→事務員」(1)「張→宿主」(1)「張→受付」(1)

話し手<聞き手・疎 (0)

話し手<聞き手・親 (3):「番頭→張」(1)「張→先生」(2)

話し手=聞き手・親 (4):「范→李」(1)「王→張」(1)「李→范」(2)

話し手=聞き手・疎 (2):「李→行路人」(2)

「伺う」は補語を高める機能があるので、友人同士やより身分が低い人に用いるのは不自然であると思われる。例えば、

(4) [王] イエ、再、伺ヒマス、今日ハコレデゴ免ヲ蒙（カウム）リマス。以後再來罷今天對不起了（王→張 p.51）

のような例が見られる。そもそも、王と張は友人同士であり、補語を高める機能がある表現「伺う」を用いるのは不自然であるが、本書の漢文の記述から王と張は長い間連絡を取っていなかったことが窺われる。そこで、王は張に「伺う」を用いるのは心理要素⁽³⁾の影響が関係している可能性も考えられる。

また、以下のような疎の関係を持っている人の間で補語を高める表現「伺う」を用いる用例も見られる。

(5) [李] 一寸伺ヒマス、順天堂ハ何處デスカ。請問一聲順天堂在那个地方呢

[行路人] 順天堂ハソノ大キイ病院デス。順天堂是那個大病院（李→行路人 p.146）

さらに、三人称者を主語として使っている用例も見られる。例えば、

(6) [番頭] ソレカラ明日再伺ヒマスト云ッテ、歸リマシタ。那麼還說了明天再來就回去了（番頭→張 p.105）

「致す」は親の関係を持っている人の間で多く用いられる。用例を見ると、「致す」は2つの用法に分かれることがわかる。1つは例（7）のような賛成を表す「そう致しましょう」、もう1つは例（8）のような相手に状況を聞く「どう致しましたか」である。本書の中で、賛成を表す「そう致しましょう」は9例であり、相手に理由を聞く「どう致しましたか」は1例見られる。

(7) [張] ソレハ、ヨロシイ。私モ賛成デス。明日カラ、キットソー致シマセウ。ソーシテ、范サンニモ、ソー願ヒマセウ。那麼很好我也賛成從明天起一定就是那個樣兒而范君也甚願意（張→李 p.32）

(8) [李] 今日ハ。時計ヲ一寸見テ下サイ。今天好呵請備替我看々這個表

[時計師] ハイ。コレハ大變傷ミマシタネ。ドー致シマシタカ。是。這已經壞很了呢為什麼緣故呢（時計師→李 p.180）

「申す」は「第六回 朋友來訪」において初めて見られる。

(9) [下女] 只今、コー云フオ方ガマ井リマシテ、李サンニ、オ目ニカカリタイト申シマス。現在叫做這個名字的人來了說要會々李君（下女→李 p.43）

「申す」は主に疎の関係を持っている人の間に使用されている。また、例（9）のように主語が話し手ではなく、三人称者である場合について、菊地（1997）は

「申す」には、主語を低めるわけではなく、丁重さをあらわすだけの趣旨でⅢ人称者

を主語として、たとえば学者の講義で「プラントンが申しますには、アイデアというのが…」などと使う丁重語としての用法もあるが（後略）(p.308)と述べている。このように、「申す」は三人称者を主語とする場合、ただ丁重さを表している。

また、本書では

(10)〔日本人〕ソレハ中々澤山デスネ。私ハ用事ガアリマスカラ、ココデオ別レイタシマス。此邊ガ一体ニ瀧ノ川ト申シマスガ、紅葉ノアリマス處ハ（後略）能奉陪了這邊都是叫做瀧之川有紅葉的地方…（日本人→張 p.170）

のように話し手が聞き手に新しい情報を紹介する時に「申す」を用いる場合もある。この場合、「申す」の主語は特定の人ではなく、民衆一般である。

本書における「申す」は主に「…と申す」の形式で現れ、使う場面の観点から、3つに分けることができる。3つとは、①自己紹介②三人称者の話の伝達③新しい情報の紹介である。

「受ける」の意を表す「蒙る」は3例ある。その中で、「御免蒙る」のような慣用的な表現は2例見られる。

(11)〔王〕イエ、再、伺ヒマス、今日ハコレデゴ免ヲ蒙リマス。以後再來罷今天對不起了（王→張 p.51）

(12)〔李〕イヤ、オアシハ働ガ出スノデスヨ。不是是要働拿錢出來的哪

〔下女〕ソシナラ、ゴ免蒙リマセウ。若是那个様子我就谢谢罷（下女→李 p.87）

これまでの調査では、松本亀次郎編纂の教科書の中で、「蒙る」は「名詞を蒙る」として現れるが、助詞を省略する「名詞+蒙る」は初めて見られる。

「差し上げる」は本書において以下の1例のみ見られる。

(13)〔張〕ソレカラ、此手紙ハ松橋先生カラノ手紙デゴザイマス。ドーズ差シ上ゲテクダサイ。

那麼這一封信是松橋先生的信，請働拿去。（張→事務 p.214）

上の例(13)では主語である張が補語に当たる事務の先生に謙讓語Ⅰの「差し上げる」を使用するのは誤りがない。ただし、『日本国語大辞典（第2版）』によると、「ください」は「くださる」の命令、要求表現として用いられ、動詞用法だけでなく、補助動詞の用法もあることが知られる。そう考えると、「差し上げる+てください」は話し手が聞き手に命令し、「差し上げる」の動作をさせることを表す。しかしそうすると、「差し上げる」の

主語は話し手の張ではなく、聞き手の「事務の先生」になってしまい、意味的には通じないと考えられる。したがって、例(13)での「差し上げる+てください」の用法は多少違和感があると思われる。

「食べる」の意を表す「いただく」(例14)と「もらう」の意を表す「いただく」(例15)は各1例である。

(14) [李] ソーデスカ、ソレデハ、今晚買ッテ來テ、寄り合ッテ喫ベマセウ。是麼那麼今晚上一點兒來在一處兒吃罷

[下女] ソレハ、アリガトゴザイマス。頂キマセウ。那麼謝謝我總領受就是(下女→李 p.86)

(15) [范] 支那料理ナラバ幾何金デスカ。若是吃中國菜是多少钱

[宿主] 支那料理デスト、八圓バカリ戴カ子バナリマセン。是中國菜則非八塊錢的樣子不成功(宿主→范 p.97)

「食べる」の意を表す「いただく」について、菊地(1997)では

おそらく初めは飲食物を目上からもらう意で使われていたのだろうが、その後、必ずしも目上からもらって<食べる/飲む>場合に限らず、単に自分の<食べる/飲む>行為をへりくだって述べる用法も生まれた。(p.227)

と述べられている。例(14)は下女から李(客)に対する会話であり、動詞「いただく」の主語(話し手)は下女である。したがって、本書における「いただく」は謙讓の意を含むと考えられる。

それに対して、同じ「食べる」の意を表す謙讓表現「頂戴する」は、「第四回 調戲婢女而練習日本語」における

(16) [下女] 働(アナタ)、ゴ飯ハ如何デスカ。働的飯怎麼吃

[李] ハイ、モ一杯、頂戴シマセウ。是還要一碗(p.27 李→下女)

の1例しか見られない。上の例での「頂戴する」の主語(話し手)は李であり、話し手は聞き手(下女)より身分が高いため、「頂戴する」は謙讓というよりただ丁寧さを表すものであると考えられる。

「あげる」は3例あり、美化語になる傾向が見られる。例えば、

(17) [下女] 多分、六錢デゴザイマセウ。大概六分洋錢罷

[張] ソレデハ、十錢アゲマス。急イデ買ッテ下サイ。然則拿一角錢把働請働快點買來(張→下女 p.30)

である。また、他の2例で、主語に当たる人物の身分は補語より高いため、「あげる」は

(74)

他の2例においても美化語として用いられていると考えられる。

謙讓語Iの「お目にかかる」は対人関係から見ると、主に目下から目上に対する会話で使用されているが、

(18) [李] 久シクオ目ニカカリマセンデシタ。ゴ機嫌ヨロシウ。許久没見着爾現在很好若
(李→范 p.6)

のように、友人同士の間で用いられる用例は2例見られる。漢訳から李と范は長い間に会ったことがないことが知られ、心理要素の影響を考えれば、誤りではないと考えられる。

菊地 (1997) によると、「存じる」は謙讓語Bとして、「知る」と「思う」の意を表している。しかし、本書では「思う」の意を表す「存じる」が全く見られなく、例 (19) のような「知る」の意を表す用例だけが見られる。

(19) [下女] アリマスカ、アリマセンカ、私ハヨク存ジマセン、(後略) 有與沒有我不甚
知道 (女→張 p.125)

3.2.2 『中日対照実用会話篇』における謙讓補助動詞

本書における謙讓補助動詞の使用状況を表1.2のように示す。

表1.2 『中日対照実用会話篇』における謙讓補助動詞

形式	活用	用例数	計
…致す	連用形 (…致し)	31	31
…て参る	連用形 (…て参り)	13	13
お(ご) …致す	連用形 (お(ご) …致し)	7	7
お(ご) …申す	連用形 (お(ご) …申し)	5	5
お(ご) …する	連用形 (お(ご) …し)	3	3
…申す	連用形 (…申し)	1	1
…てあげる	連用形 (…てあげ)	1	1
…ていただく	連体形 (…ていただく)	1	1
合計			61

謙讓補助動詞の中で、最も多く使用される表現は「…致す」である。一方、1例しか見られない表現は「…申す」「…てあげる」と「…ていただく」である。

「…致す」は「第三回 兩君依范君之引路看東京之景致」における

(20) [李張] ハイ、アリガト一、頂戴致シマセウ。是費心謝々領受了罷 (李張→下女 p.17) を初出とする。

本書における「…致す」は親の關係を持っている人の中で多く使用され、特に友人同士の間で多く用いられている。また、例 (21) のように公的な場面で使用される用例は3例ある。

(21) …深ク感謝イタシマス。這更感激不盡 (p.210)

(22) [張] 昨年中ハ、オ世話様ニナリマシタ。本年モ相變ラズ願ヒマス。去年承照顧了
今年惟願還是那樣照顧我

[先生] イヤ、失禮バカリイタシマシテ、那裡總是個對不起了 (先生→張 p.199)

例 (22) は話し手>聞き手の關係であり、しかも、主語は自分を低め、補語を高める必要がない。そこで、「…致す」はただ話し手が聞き手に丁重さを表すために用いる表現である。

「…て参る」は「旅館語 (一) 閑話」における

(23) [張] …スグ瀟車ニ乗ッテマ井リマシタ。即刻就坐火車來了 (張→范 p.8)

を初出とする。対人關係の条件からまとめると、以下のようになる。

話し手>聞き手・親 (1): 「李→下女」(1)

話し手>聞き手・疎 (0):

話し手<聞き手・親 (6): 「下女→范」(3) 「下女→張」(2) 「下女→李」(1)

話し手<聞き手・疎 (2): 「主人→張」(1) 「洋 (洋服屋さん) →李」(1)

話し手=聞き手・親 (4): 「張→范」(3) 「李→張」(1)

話し手=聞き手・疎 (0)

「…て参る」は親しい人の中でよく使用されるが、話し手>聞き手・親の場合は、例 (24) の1例しか見られない。

(24) [下女] オ歸り、大層ゴ機嫌デス子。晝ゴ飯ハメシアガリマシタカ。働回來了働很好
哪午飯已經吃過了麼

[李] 今、アスコノ天麩羅舗デ、ヤッテマ井リマシタ。剛纔在那裡油炸店裡吃了來 (李→下女 p.82)

また、友人同士や話し手<聞き手の場合に多く用いられる。

(25) [范] ハイ、アリガト一、今日ハ何處ヘイラッシャイマシタカ。是今日到甚麼地方來呢

[張] 構文學院ト振武學校ヘ往ッテマ井リマシタ。往弘文學院和振武學校來 (張→范

(76)

p.88)

(26) [下女] ソーデスカ、私ニハワカリマセンガ、一寸主人ニ聞イテマ井リマスカラ、オ待チ下サイ。

是麼因為我不知道要去問主人請等一等 (下女→范 p.10)

「お(ご) …する」は3例あり、「第二十回 兩君被竊」における、

(27) [巡查] ソレデヨロシイ。モシ出タラゴ通知シマス。那麼就可以若是查出來了我就通知爾 (巡查→張、李 p.197)

を初出とする。「…」に入る語は動作性の名詞「通知」である。例(27)を加え、「…」に入る語は「通知」(1)「話」(2)であり、すべて動作性の名詞である。また、「お(ご) …する」は対人関係から見ると、話し手<聞き手・疎の場合は例(27)の1例しかなく、一対多の公的な場面(演説)で使われるのは以下の2例ある。

(28) デ、今諸君ノ前デ、オ話スルコトナドハ、實ニオ恥シキコトデゴザイマス。今天在諸君の面前來演説實在抱愧 (演説 p.205)

(29) 私ガ、日本語ヲ學ブニ付テノ失敗ヲオ話シタナラ… 若就我學日本話不得法的事情説々… (演説 p.205)

「お(ご) …致す」は「第六回 朋友來訪」における

(30) [王] ヤ、モー二時ニナリマス、長クオ邪魔イタシマシタ。コレデオいとまイタシマス。呀已經兩點鐘了吵鬧的很久了從此告辭了 (王→張 p.50)

を初出とする。例(30)を加え、「…」に入る語は「邪魔」(1)「いとま」(3)「粗末」(1)「別れ」(1)「供」(1)であり、動作性の名詞が多く見られる。「お(ご) …致す」の使用を対人関係の条件でまとめると以下の通りになる。

話し手>聞き手・親 (0)

話し手>聞き手・疎 (0)

話し手<聞き手・親 (2):「張→先生」(2)

話し手<聞き手・疎 (1):「主人→張」(1)

話し手=聞き手・親 (2):「王→張」(2)

話し手=聞き手・疎 (1):「日本人→張」(1)「隣客→張」(1)

上記の通り、「お(ご) …致す」は話し手>聞き手の場合は、全く使用されていないことが知られる。ただし、話し手=聞き手の場合に用いられているため、本書における「お(ご) …致す」は謙讓語Ⅱとしても用いられている。

「お（ご）…申す」は「第六回 朋友來訪」における、

- (31) 〔王〕久シクオ目ニカカリマセンデシタ。昨日、范サンカラ、皆サンノ東京ニマ井リマシタ事ヲ聞キマシタ。ソレデ、今日オ訪子申シマシタ。何時、入ラッシャイマシタカ。好久沒見了昨天從范君那邊聽到閣下兩位到了東京所以今天來奉看幾時到的呢
（王→李、張 p.44）

を初出とする。例（31）を加え、「…」に入る語は「訪ね」（1）「頼み」（1）「尋ね」（1）「貸し」（1）「願ひ」（1）で、全て動詞連用形である。「お（ご）…申す」は疎の関係を持っている人の間で多く用いられている。

「…申す」は「第十九回 張君散歩」における例（34）しか見られず、「…」に入る語は動作性の名詞「失禮」である。

- (32) 〔下女〕コレハ失禮申シマシタ。ドーズゴ勘辨シテ下サイ。這對不起了請不要見怪（下女→張、李 p.188）

本書において待遇価値のほぼ等しい「お（ご）…する」「お（ご）…致す」「お（ご）…申す」「…申す」の中で、「お（ご）…致す」が最も多く用いられている。それに対して、「…申す」は1例しか見られない。より新しい表現「お（ご）…する」は「…申す」より多く用いられているが、まだ主として使用される表現にはなっていない。

「…てあげる」は本書において1例見られる。

- (33) 〔書生〕始メテゴザイマスカ。以前診察シテ上ゲタコトガアリマスカ。是初來看病的廳以前來看過沒有呢（書生→張 p.156）

例（33）での話し手は書生であるが、主語は医者であると考えられる。それに対して、聞き手と補語は同じ人物の張である。主語は三人称者の医者であるが、書生は医者との関係者であるため、例（33）の「…てあげる」は謙譲の意を表すと考えられる。

3.2.3 『中日対照実用会話篇』における助詞を介する謙譲表現

本書における助詞を介する謙譲表現は「お（ご）…を致す」と「お（ご）…を願う」の2形式である。

- (34) 〔范〕今日ハ、丁度私ノ學校ハ休ミデスカラ、皆サンノ、東京見物ノ、ゴ案内ヲ致シマセウ。

今天恰好我的學堂裡放假陪諸位去看看東京的景致罷（范→李 p.21）

(78)

(35) ゴ推量ヲ願ヒマス。請諸位不要見怪（演説 p.211）

「お（ご）…を致す」の「…」に入る語は「案内」（１）「供」（１）であり、この表現は友人同士や目下の人から目上の人に対する会話で使用されている。

「お（ご）…を願う」の「…」に入る語は「教示」（１）「推量」（１）であり、この表現は目下の人から目上の人に対する会話で使われている。また、例（35）のような公的な場面で用いられる用例も見られる。

4. 『漢訳学校会話篇』

4.1 『漢訳学校会話篇』について

『漢訳学校会話篇』は1906（明治39 光緒32）年に宏文学院の教師である菊池金正が編纂し、誠之堂書房から発行された教科書である。

本書は「緒言」に「其内容分爲文字，語法要例，教室會話，語法摘要四篇」（p.1）とあるように4篇で構成されている。また、「本書既以教室授受之際，言語速通問答無礙爲主要，故語法要例語法摘要，皆不過爲教室會語之一助而已」（緒言 p.1）と記述してあることから、本書は学校用語を中心として編纂された教科書であることが知られる。

本書の漢訳について、「緒言」において「本書漢譯，但求意明詞達，於普通清語，不無缺點，所謂直譯是也，方言之難統一，亦事之無可如何耳」（p.2）と説明している。

4.2 『漢訳学校会話篇』における謙讓表現

本書における謙讓表現は6形式、13例である。そのうち、謙讓動詞は表2.1に示すように4形式、10例であり、謙讓補助動詞は2形式、3例である。また、助詞を介する謙讓表現は見られない。

表2.1 『漢訳学校会話篇』における謙讓動詞

形式	活用	用例数	計
参る	連用形（参り）	4	4
申す	連用形（申し）	3	3
致す	連用形（致し）	2	2
あげる	連用形（あげ）	1	1
合計			10

謙讓動詞の中で、最も多く見られるのは「参る」であり、1例しか見られないのは「あげる」である。

以下の例(36)では、話し手(私)は補語に当たる人物(先生)に「あげる」を用い、補語(先生)を高める一方、主語(私)を低め、謙讓の意を表している。

(36) 先生ニ手紙ヲ上ゲマシタラ、直ニ返事ヲ下サイマシタ。我給先生送了一封信即刻就給了我的回信。(p.34) (太線は補語を表す。筆者による。以下同様。)

本書において例(37)aのような「申す」に関する誤用の例が見られる。そもそも「申す」は尊敬の意を含めていないことは、『日本国語大辞典(第2版)』の記述から知られる。

(37) a 教 君ノ姓名ハ、何ト申シマスカ。你姓甚麼。

b 生 私ハ、某ト申シマス。我姓某。(教師→学生)(p.42)

謙讓補助動詞は「…てあげる」と「…致す」の2形式で、「…致す」のほうが多く見られる。本書において「…てあげる」に関する用例は以下の1例しか見られない。

(38) 君ノ分ラナイコトハ、私ガ教ヘテ上ゲル。你有不明白的事我就教給你。(p.34)

例(38)での話し手(私)は補語に当たる人物(君)に「…てあげる」を使用し、第二人称代名詞「君」は『日本国語大辞典(第2版)』の記述によると、当時すでに、人称代名詞「君」は尊敬の意をすでに失っていたと思われる。したがって、上の例の「…てあげる」は謙讓の意を含まないと考えられる。

「…致す」は2例見られ、いずれも「前納致します」の形で現れる。

(41) 生 唯今、前納致シマス。我立刻就繳。(学生→教師 p.92)

5. 松本亀次郎編纂の会話教科書との対照比較

これまで調査対象とした6冊会話教科書の中で、松本亀次郎が編纂した会話教科書は3冊あり、それぞれ1914(大正3)年(『漢訳日本語会話教科書』)、1927(昭和2)年(『日本語会話』)、1940(昭和15)年(『華訳日本語会話教典』)に発行されたものであるが、1914(大正3)年に出版された『漢訳日本語会話教科書』は松本亀次郎が宏文学院で在職していた時、嘉納治五郎の委託を受けて編纂されたものであることが「緒言」の記述から知られる。それゆえ、本稿では『漢訳日本語会話教科書』と比較しながら、考察を行う。

以下、品詞別、執筆者別によって松本亀次郎と菊池、唐木が著した会話教科書における謙讓表現を比較しながら分析する。なお、『漢訳日本語会話教科書』における謙讓表現の形式は薛(2018a)を参考にする。

5.1.1 謙讓動詞について

宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における謙讓動詞の使用状況を表3.1に示す。

表3.1 宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における謙讓動詞の使用状況

形式	執筆者	松本	菊池	唐木
致す		○	○	○
参る		○	○	○
差し上げる		○	×	○
申し上げる		○	×	○
申す		○	○	○
いただく		○	×	○
伺う		○	×	○
存じる		○	×	○
拝見する		○	×	×
蒙る		○	×	○
お目にかける		○	×	×
承る		○	×	×
お目にかかる		○	×	○
承知する		○	×	×
畏まる		○	×	○
あげる		○	○	○
頂戴する		×	×	○

宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における謙讓動詞は全17形式あり、そのうち、いずれの編纂者も扱っている表現は「致す」「参る」「申す」「あげる」である。唐木編纂の教科書のみ見られない表現は「頂戴する」である。

「差し上げる」を扱う編纂者は松本、唐木である。しかし、唐木が編纂した教科書における「差し上げてください」は多少違和感があると思われる。それに対して、松本編纂の会話教科書で「差し上げてください」の例が全く見られない。「蒙る」は松本、唐木が取り上げる表現である。出現形式は2つあり、「名詞を蒙る」と「名詞+蒙る」である。「あげる」はどちらの編纂者も取り上げている表現であり、美化語となる傾向が見られる。

5.1.2 謙讓補助動詞について

宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における謙讓補助動詞の使用状況を表3.2に示

す。

表3.2 宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における謙譲補助動詞の使用状況

形式	執筆者	松本	菊池	唐木
お（ご）…申す		○	×	○
…致す		○	○	○
…て参る		○	×	○
お（ご）…致す		○	×	○
お（ご）…申し上げる		○	×	×
お（ご）…する		○	×	○
…てあげる		○	○	○
…ていただく		○	×	○
…申す		×	×	○
…て差し上げる		○	×	×
…奉（たてまつ）る		○	×	×

表3.2から見られるように、松本しか取り上げていない表現は「お（ご）…申し上げる」「…て差し上げる」「…奉る」である。また、「…申す」は唐木編纂の教科書のみに見られる表現である。さらに、全ての編纂者が取り上げている表現は「…致す」と「…てあげる」である。

小松（1968）によると、「お（ご）…申し上げる」が多く使用されるようになったのは昭和からである。菊池、唐木が編纂した教科書は1906（明治39）年のものであるため、彼らが編纂した教科書で「お（ご）…申し上げる」が見られないのはごく自然である。それに対して、松本が編纂した教科書はこの表現を取り上げている。

「…申す」は唐木が編纂した教科書のみで確認できる。同年代に発行された菊池編纂の教科書だけでなく、他の編纂者が著した教科書においてもこの表現は見られない。そもそも、江戸語で広く使用されていた「…申す」は時代の変遷とともに見られなくなるので、明治後期の教科書で現れないのは自然であると考えられる。

「お（ご）…する」は菊池以外全ての編纂者が取り上げている表現である。また、「お（ご）…する」の尊敬の用法は松本編纂の教科書でしか見られない。（生。先ヅ案内ヲ頼ムトコロカラ、御話シシテ下サイ。（『漢訳日本語会話教科書』学生→教師 p.135）辻村（1967）は

「お（ご）…する」という形式が、本来の用法を逸脱して目上や相手の動作に用いら

れることが、近時ますますひろがる傾向にあることで、これは事によると新しい上位主体語の形式として一般化しかねない勢いにあると言えますが… (p.143)

と述べていることから「お（ご）…する」の尊敬の用法は少なくとも1960年ごろ現れ、昭和時代に使用され始めたことが知られる。『漢訳日本語会話教科書』は明治後期の教科書であるため、本書で「お（ご）…する」の尊敬の用法が見られるのは先行研究の記述と異なる部分があると言える。また、小松（1967）では「「お（ご）…する」の尊敬用法（規範的立場から誤用）は、書かれた文章を対象としても各時代を通じて見つけることができる。」と記述されており、「お（ご）…する」は尊敬の用法として書き言葉としてどの年代においてもよく用いられることが知られる。しかも、小松（1967）によると、「お（ご）…する」は明治30年代の初めまでに成立し、戦前までその自体が規範として認められていなかったため、なぜ「お（ご）…する」の尊敬の用法は「お（ご）…する」が会話教科書で現れ、しかも、かなり規範性が求められる日本語教科書で現れるのかは、非常に興味深いことである。

5.1.3 助詞を介する表現について

宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における助詞を介する謙讓表現の使用状況を表3.3に示す。

表3.3 宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における助詞を介する謙讓表現の使用状況

形式	執筆者	松本	菊池	唐木
お（ご）…を願う		○	×	○
お（ご）…を致す		○	×	○
お（ご）…を申し上げる		○	×	×
お（ご）…をいただく		○	×	×
お（ご）…をする		○	×	×

表3.3から見られるように、松本のみが取り上げている表現は「お（ご）…を申し上げる」「お（ご）…をいただく」「お（ご）…をする」である。一方、ほとんどの教科書で見られる表現は「お（ご）…を願う」である。菊池編纂の会話教科書においては助詞を介する謙讓表現は全く現れない。一方、同じ1897（明治30）年に出版された『中日対照実用会話編』においては「お（ご）…を致す」と「お（ご）…を願う」の2形式が見られる。宅間（2002）によれば、「お（ご）…をする」は時代が下って、見られる数が少なくなる一方、助詞を

介していない表現「お（ご）…する」は多く使用されるようになったという。このことは、唐木編纂の教科書で「お（ご）…する」のみが確認できることと一致する。菊池は「お（ご）…する」だけでなく、前段階の形式「お（ご）…をする」も使用していない。

6. おわりに

本稿では宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書『中日対照実用会話篇』と『漢訳学校会話篇』における謙譲表現の特徴を明らかにしている。全体を通じてみると、松本亀次郎編纂の会話教科書における謙譲表現の形式が最も豊富である。それに対して、菊池編纂の教科書は学校会話に主眼を置いているためであろうか、現れる謙譲表現の形式が最も少ない。教科書のページ数から見ると、松本亀次郎編纂の教科書のほうが多い。このことは、松本編纂の教科書において謙譲表現の形式が多く見られる理由ではないかと考えられる。

注

- 1) 辻村敏樹（1977）「日本語の敬語の構造と特色」 p.51～58
- 2) 菊池（1997）は「「伺う」は、①「（話などを）聞く」②「尋ねる」③「訪ねる」意の謙譲語 A」と述べている。
- 3) 辻村敏樹（1977）によれば、敬語は極めて心理的なものである。つまり、敬語の使用は話し手の心理とかなり繋がっている。本稿では、心理の原因で敬語の使用を左右する要素を心理要素とする。

調査対象

唐木歌吉（1906）『中日対照実用会話篇』 中東書局

菊池金正（1906）『漢訳学校会話篇』 誠之堂書房

参考文献

王鉄橋（1989）「現代中国語の敬語表現—日本語との比較—」『言語と文化』第2号 pp.25-48

川口義一（2002a）「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研究会における「事前課題」分析（1）—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15 早稲田大学 pp.15-28

川口義一（2002b）「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研究会における「事前課題」分析（2）

- 一]『講座日本語教育』38 早稲田大学日本語研究センター pp.1-15
- 川口義一 (2004)「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研究会における「事前課題」分析・番外編—」『早稲田大学日本語教育研究』4 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.1-13
- 菊地康人 (1997)『敬語』講談社学術文庫
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 小松寿雄 (1968)「「お…する」「お…いたす」「お…申し上げる」の用法」『近代語研究』第二集 近代語学会編 武蔵野書院 pp.315-328
- 小松寿雄 (1967)「「お…する」の成立」『国語と国文学』44 (4) 東京大学国語学会 pp.93-102
- 薛静 (2018a)「松本亀次郎編纂の日本語教科書における動詞の謙讓語の扱い—大正期の教科書を中心に—」『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第49輯 pp.111-136
- 薛静 (2018b)「松本亀次郎編纂の会話教科書『華訳日本語会話教典』における謙讓語の使用実態」『大学外語研究文集』19 pp.384-395
- 薛静 (2018c)「松本亀次郎編纂の日本語教科書における謙讓表現—文典型教科書を中心に—」『國學院大學日本語教育研究』9 pp.52-64.
- 薛静 (2019)「松本亀次郎編纂の会話教科書『日語会話』における謙讓表現について」『大学外語研究文集』20 pp.382-392
- 宅間弘太郎 (2002)「「お…する」表現をめぐって：その成立と規範的用法について」『文語研究』93 九州大学国語国文学会 pp.39-51
- 田中章夫 (2002)「近代の敬語表現」『近代日本語の語彙と語法』東京堂
- 辻村敏樹 (1967)『現代の敬語』共文社
- 辻村敏樹 (1968)『敬語の史的研究』東京堂
- 辻村敏樹 (1977)「日本語の敬語の構造と特色」『岩波講座日本語4 (敬語)』岩波書店 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 (第2版)』小学館
- 日本語教育学会 (2005)『新版日本語教育事典』大修館書店
- 吉岡英幸 (2000)「明治期の日本語教材」『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』凡人社 pp.13-25
- 吉岡英幸 (2005)「松本亀次郎編纂の日本語教材—語法型教材を中心に—」『早稲田大学日本語教育研究』6 早稲田大学大学院日本語教育研究 pp.15-27
- 吉岡郷甫 (1926)『文語口語対照文法』光風館書店